

アートをテーマに医療と介護現場の課題解決策を考えるワークショップが20日、大津市緑町の高齢者福祉施設「緑の癒」で始まった。2日間にわたって医療法人の若手職員と芸術系大学の学生たちが、医療や介護のイメージ改善、介護予防につながる取り組みを模索する。

大津・高齢者福祉施設でワークショップ



看護師から説明を受ける学生たち(右)＝大津市真野5丁目・琵琶湖大橋病院

市北部で病院や高齢者福祉施設を展開する医療法人弘英会の若手職員が発案し、成安造形大と共同でプロジェクトを立ち上げた。高齢者が住み慣れた地域で医療、介護を受けられる地域包括ケアを進める中、アートを取り入れて地域の人たちの関心を高めることを目的としている。

アート取り入れ地域の関心上 医療と介護イメージ改善

若手職員と学生ら 課題解決策探る

初日は事前説明や自己紹介の後、グループに分かれて病院や介護老人保健施設などを見学した。琵琶湖大橋病院では、看護師が業務の内容や患者との接し方などを説明した。同大学2年の渡邊模瑠子さん(19)は「大変な仕事だが、看護師さんたちは患者さんとの関わりの中に楽しさを感じている。すてきな職業だと思った」と話した。

課題解決策の提案に向け、4年の水田有咲さん(21)は「医療や介護は命に関わる仕事。何ができるのか、しっかりと考えたい」と語った。

21日は先進事例を学んだり、アイデアを話し合ったりする。本年度中に実現が可能な企画としてまとめ、発表する。

(峰政博)

医療、介護のイメージを身近に

アート学ぶ学生の 新鮮なアイデアを

アートを学ぶ学生の新鮮な発想を生かし、医療や介護を身近に感じてもらうと、大津市の医療法人「弘英会」は20、21の両日、同市の高齢者施設で、成安造形大(同市)の学生らと意見交換会を行った。出し合った意見は企画としてとりまとめ、6月から実践することを目指す。

弘英会は、市内で病院や福祉施設を運営。医療、介護現場を地域住民に広く知ってもらう新たな取り組みを始めようと昨年6月、若手職員のプロジェクトチームを発足。地域を巻き込み、アートの発想を企画に取り入れようと、近くの同大に協力を依頼した。大学からは学生や教員、会

大津の弘英会 成安造形大生と意見交換会

からは介護福祉士や栄養士の計15人ほどが参加。20日は、学生が施設を訪れ、現場の実態や課題を把握した。21日は、学生と施設の職員らがそれぞれの視点から意見を出し合った。

意見交換では、介護施設で宿泊体験や、介護職員のキャリアパスを示した人生ゲーム作成などの意見が上がった。多くの意見の中から、介護の仕事について学生と職員が話し合うラジオ番組制作し、音声サイトや動画で発信することや、ペットボトルランタンを使った電飾など地域住民と一つの作品づくりに取り組むイベントの実施などの企画案を取りまとめ



医療や介護を親しみやすくするための意見交換する学生や職員ら=大津市緑町の高齢者施設で

た。参加した2年の渡辺慎璃子さん(19)は「日頃は医療や介護の問題を身近に感じることはなかったが、この2日間で距離が縮まった」と振り返った。弘英会の小椋香菜子専務理事(29)は「医療と介護の新しい形をつくりたい。いろいろな意見が出てきて勉強になった」と話した。

(和泉萌花)

「アート学ぶ学生の新鮮なアイデアを」
この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています
【許諾番号】20240425-30778